

留学体験記

3年1組23番 蜷川薫香

1. 留学を志した理由
2. 留学準備について
3. 学んだこと
4. 困難だったこと
5. 思い出に残っていること
6. ホストファミリーについて
7. 成長したこと
8. 留学を考えている人へ

これは蜷川薫香がアメリカへ留学に行った体験記である。

①留学を志した理由

まず、私が留学を志した理由は、高校留学をしておくことで将来の夢が実現しやすくなると思ったためである。私の将来の夢は日本の高校で英語の教員として働くことだ。言語を教えるにはその言語を流暢に話せた方がいいと考えたこと、また、高校生のうちに異文化に触れておくことで自分の視野を広げることができると思った。幼少期から両親の影響で英語に囲まれて育ったため、自分の好きな得意なことを仕事にできたらきっと楽しいと思ったのも理由の一つである。

中学生の頃、母親の海外での生活を聞いたことで留学や海外での生活に興味を持った。しかし一年間自分の親の元を離れて一人で海外に行き高校に通うなんてことは私にはハードルが高すぎると怖気付いていた。そんなとき、同じ高校の友人に私が留学に行こうかどうか悩んでいると相談すると、彼女は一年間の留学をするつもりだと言ったため、私の中で興味があるけど未知だった留学は、その友人のおかげで少し身近に思えるようになった。

交換留学生は留学先国が限定されており、英語圏であるカナダ、アメリカの二つの選択肢がある。ところが、コロナの感染拡大により2020年からカナダへの留学を計画していた留学生たちの出国が2021年に延期されたことで、カナダへの留学の定員が早々に埋まった。この年に交換留学を決めた留学生はそのカナダへの留学生たちを除くと全員アメリカに留学することに決まっており、私は2021年度に留学に応募したため留学先国はアメリカとなった。

②留学準備について

アメリカへの交換留学生になるためには条件がある。まず、アメリカの高校の授業についていけるかどうかを図るELTISという試験に合格する必要がある。ELTISはリスニングとリーディングの二つの技能からなる英語技能試験である。数学や理科・社会などの広い観点から学術的な問題が出題され、一定の正答率があれば合格とされる。一度目の挑戦は勉強不足により不合格だった。クラスメートや先生からの励ましや応援の言葉をもらいながら、放課後毎日のように学校

に残って勉強をし、次の試験では絶対に合格するぞ、と意気込んで試験を受けた。試験を受けた生徒の人数は自分が想像していたよりも多く、リスニングが繰り返されなかったり、テストは消しゴムの使用を禁止していたりと、緊張しっぱなしだったが、無事合格することができた。

試験に合格すれば、次は二次試験である保護者同伴の面談と日本語と英語での面接が行われる。留学の志望理由や留学中に行いたい活動・帰国後、日本でどのようなことに貢献できるかなどの具体的な質問がされる。その面接に受ければ最終的に正式に交換留学に行くことができる。留学先でのトラブルにどのように対処するのかを聞かれた際、エージェントからもらった冊子を熟読していたのでうまく答えることができた。それに対し、英語での面接は自分の中ではあまり自信の持てないものであった。私の母親は英会話教室を営んでいるので、小学生の頃は話しているときの文法やフレーズの間違いを指摘されることがあり、私は母親の前で英語で話すのが億劫で仕方がなかった。この面接を行ったときは面接官よりも母親に緊張していたのを覚えている。なににせよ、面接には合格したので良かった。

私は奨学金取得にも応募することにした。経済的な補助を受けることで両親の負担を減らすことができると考えたからである。二つの試験に合格すると五十万円の奨学金を受け取ることができる。小論文「二十一世紀のリーダーに求められる素質とは」と「自己アピールしてください」というテーマの二十分間のプレゼンをすることになった。小論文は繰り返し添削と推敲をし書き上げた。また、自己アピールは自分が中学生時代に茶道部で培った日本の精神や浴衣の着付けを披露し、異文化交流に貢献できることをアピールした。幸運なことにどちらの試験でも高い評価を得て、奨学金を受け取る事ができた。

③学んだこと

留学中に学んだことは大まかに三つに分けられる。まず、アメリカの学校や授業について、二つ目はアメリカの文化について、そして人との付き合い方である。

アメリカの学校は一般的な日本の学校に比べて自由度が高い。まず、染髪、ピアス、私服での登校、自動車の運転やアルバイトに規制がない。日本でも私服での登校が許可されている学校もあるが、私の通っていたアメリカの高校では、着ぐるみでの登校も許可されており、授業を受ける際に支障がなければOKなのだという。授業の選択も学年を問わず生徒が興味のある授業を受けられるのも一つの魅力であるといえる。日本の学校の授業方法といえば、教師が黒板の前に立ち生徒は教師の話を聞きながら板書をしているのを想像するだろう。それに対しアメリカの高校では教員によって授業の進め方が全く異なるのが興味深かった。特徴的なのは、私がとっていた環境科学、アメリカ史、英語の授業方法である。環境科学の教師は生徒の研究の正確性や創意工夫を重要視していたため、授業の初めに動画を視聴し、気になったテーマをグループで研究しレポートもしくはポスターを作成するような授業方法であった。アメリカ史のクラスでは、生徒の自主性や社会性を高めるため、生徒に国の代表を振り分け実際に会議を行わせたり、株式の説明をするために株式会社のオーナーと株主に生徒を振りわけ、取引を再現したりするなど、体験しながら学ぶような授業方法であった。どの授業も生徒が主体であるため「授業を受けている」というよりも「授業をつくっている」と感じて、とても充実した学びができたように思う。一

つ、欠点を挙げるとするならば、生徒によって意欲の高低差が激しいため、グループワークのメンバーは運任せであるし、生徒によって学びのスピードや理解度が大幅に異なる。そのため、高校全体を見てみると日本の授業方法は生徒が授業中に得る知識量や行う活動は一律であるため、学校全体の生徒の学力を図ることができる。また、上記にも載せてあるように、私が通っていたアメリカの高校の校則は非常に緩いため、その分大きなトラブルが起こることがある。「麻薬を持ち込まないこと」や「銃などの危険な武器は持ち込まないこと」などの日本ではあまり聞かないような校則がある。また、学校の玄関に国際空港で見るとようなセキュリティがあったり、警官が見張っていたりするため、その「大きなトラブル」がどれほど大きいかは、想像してほしい。ただ、このような大きなトラブルは一年間を通して数えるほどしかなかったので心配をする必要はない。

アメリカは移民の国とも呼ばれ、多民族が共生している国である。そのため、食文化やファッションの文化は地域によって大きく異なる。私が暮らしていたイリノイ州クインシーは、みんなが想像するアメリカバチバチの高校(アメフト部とチアリーダー達が学校の中心)というよりかは、みんながTシャツにジーンズ、フーディーにスウェットパンツを着るような非常にラフな高校だった。それはきっと私が通っていた高校は制服がなかったからだと思う。私が暮らしていた地域は、山や森はないものの街中の緑や自然が豊かで、穏やかに平和に暮らせる街の一つだと思う。ただ、田舎なので車無しでは出かけることはできない。また、バスや電車はないので車を持っていない友人と遊びに行くのは非常に困難であった。しかし、もう一度あののどかな街でのびのびと暮らしたいと思うほどには魅力的な場所である。

④困難だったこと

入学式、初めてアメリカの学校に足を踏み入れたとき、右も左もわからない私に一人の女の子が話しかけてくれた。私は自分が日本からの留学生であることや、一年間しかその高校に通わないことなどを話していた。まだ全てを聞き取れるほど英語力があつた訳ではないが、初めてできた友達なのでとても嬉しかったのを覚えている。ある日、「あなた中国人なんだよね？」と聞かれた。「いや、日本人だよ。」と訂正をしたのだが、彼女は絶えず「中国語で喋って！」「日本人も中国語で話すんだよね？」と自分の人種や国籍についていじることが増えた。この頃の私はさまざまなことによって神経質だったため、もしこれが「人種差別」だったらどうしようか、誰に相談しようかなど悩み疲れる毎日を過ごしていた。また、人種などに限らず私の服装や歩き方、ことあるごとに私の行動を指摘してくるようになったため、私の留学生生活をこの子と過ごすことはもうできない、初めてできた友達だけれど、と覚悟を決め次学期はその子と違うクラスをとることにした。それからというと、彼女に合わなくて済むことで学校に行くのが楽しくなって、憂鬱な気持ちになることもなくなった。自分にとって悪い影響を及ぼす人とは早急に距離をとった方がいいと気づいてから、今でもそれを実践している。留学期間は限られているので、少しでも一緒にいて楽しい友達やクラスメイトと一緒にいることを心がけた。しかし、これは留学期間に限ったことではなく、日本の高校生活や、長く言えば人生を楽しく過ごすには大切なことだと思う。留学に行ったことで、私は今まで気づかなかったことに自分の経験から学ぶことができ嬉しかった。また、このような体験を通

じて嫌な気持ちになることがあってもそれから教訓を得ることができるとポジティブに考えるようになった。

日々の勉強に苦勞した原因は、自分の英語力が不十分だったこととテストの形式になれなかったからである。教科の担当の先生が変わらない限りは目処をつけて勉強することができるので慣れるとそこまで大変では無くなった。レポートについては国際高校に提出するものからエージェントに報告するためのものまで数種類あった。二ヶ月ごとに自分の行動を振り返ることができたので自分を客観的に見ることができる非常にいい機会だった。また、奨学金を受け取ったことでフォトレポートなどの半年に一回提出するレポートもあったが、楽しいことや辛かったことなど、たくさんをレポートに書くことができた。

初めは、自分は日本人代表留学生だと思って過ごしなさいという言葉と責任を過度に背負っていた。だが、数ヶ月過ぎたあたりから留学生だということに甘えていることに気づき、現地の生徒と同じように過ごす決めた。それからは自分に自信を持って積極的に行動できるようになった。自分の心構えだけでここまで留学の充実度が変わるとは思っていなかったため、早急に気づいて修正できてよかったと思っている。

プロムの一週間ほど前、友達を複数人巻き込んでホストシスターと喧嘩をしてしまった。私は頭に血が上り、自分の部屋に閉じこもった。しかし、これで残りの留学を台無しにしたいと言う気持ちが強く、私はある行動を起こすことにした。私は自分の部屋にあるホワイトボードに、実際に起こった出来事だけを時系列に並べた。昂っていた自分を客観的にみることで、落ち着いて物事を考えることができた。結局どれだけ探しても自分の過失が見つからず、私は複数人に振り回されただけだったのである。だが、自分を少しでも抑制する手段として、書き出してみるということはとても効果的だった。これは今でも、何か嫌なことがあった際はとりあえず書き出すようにしている。

⑤思い出に残っていること

私が通っていたアメリカの高校では、九月にホームカミング、四月の末にプロムというダンスパーティーが行われる。ホームカミングは、その高校の卒業生が学校に戻ってきてパーティーに参加するというもので、ホームカミングのイベントはダンスパーティーの日の一週間前から始まる。ホームカミングウィークというものがあり、曜日ごとに決められたテーマの服装を着ていくというイベントである。その中でも面白かったのは、カウボーイの格好をして学校に行くというもので、生徒や先生、学校のスタッフたちが全力で変な格好をして真面目な顔で授業を行なっている様子はとても面白かった。アメリカの高校は四学年制が一般的で、このイベントには全学年が参加することができる。私はホストマザーの膝丈のドレスを借りて、友達とホームカミングのパーティーに参加した。ギリシャレストランにお昼ご飯を食べに行ったり、そのあとは友達のアパート先に遊びに行ったりした。パーティー開催の時間になり学校のジムに行くと、ジム全体がデコレーションされていたり流行りの音楽が大音量で流れていたり、私が想像していたロイヤルなダンスパーティーではなくクラブのようなもので、とても驚いた。食べ物や飲み物は自由に取ってよかつ

たりフォトブースがあったりと、学校が主催しているのが信じられないくらい自由でとても楽しかった。友達と一日中遊んだのは多分この時が初めてで、留学中の思い出ランキング五位以内には入るほど充実した1日だった。

私のアメリカのエージェントはボランティアの活動を大切にしており、他国からアメリカに来た留学生を集めて遠出しその地域でボランティア活動をするというプログラムがあった。私が2泊3日のボランティア活動に二回参加しており、森林の近くのコテージでテーブルや椅子を組み立てたり、教会に通う子どもたちにクリスマスカードを書いたりなど、日本にいる頃は一度もしたことがないようなことをたくさん経験した。留学生はヨーロッパやアジアから合計で十人ほどで、みんながネイティブではない言語を通して会話し、自分の留学生活や自分の国について話すということは自分にとって初めての経験だったため思い出に残っている。この頃の私は自分の学校に他に留学生がいることは知らされておらず、「留学生」として同じ境遇の人と話すことはこのボランティアの集まりが初めてだったため、不安や緊張を共有したりアドバイスをもらったりしてそのような精神面でも支えられることが多くて、この集まりに参加できてよかったと思っている。また、全く異なるバックグラウンドを持つ人と寝泊まりし時間を共に過ごすということは貴重な体験ができた。

留学中に約一週間程度ホストファミリーと彼らの親族と海外旅行に行った。留学前から海外旅行に行くとは聞いていたが、本当に私も連れて行ってもらえるとは思ってなかった。コスタリカへの旅行では、ホストファミリーと彼らの親族との仲を深めることができた。また、コスタリカはスペイン語圏なので今まで触れたことのないリアルなスペイン語と、異文化を知ることができた。私は留学中に二つの異なる国へ行くことができたので、とても素晴らしい経験になった。

私たちが向かったのはまずマイアミである。そこから乗り換えてコスタリカに行った。私は赤道を超えて南半球に行ったことはなかったのでとてもワクワクしていた。一週間ほどの滞在で、ビーチに行ったり買い物に行ったり、今まで経験したことのないことをたくさんした。特に楽しかったのはジップライニングと国立熱帯公園(National Tropical Park)に行ったことだ。ジップライニングは山奥で行うのだが、自然豊かな中で野生の動物を近くで見ることができた。また、国立公園ではプロのカメラマンとガイドが同行し、ナマケモノやオオハシ、コスタリカに生息している野生動物を見た。コスタリカで有名なのはスパイダーモンキーという猿なのだが、非常に人懐こい性格なので近距離で触れ合うことができた。留学中に海外旅行というとても珍しい体験ができて思い出に残っている。将来は家族を連れてコスタリカに行きたい。

⑥ホストファミリーについて

ホストマザーは日本人で、ファザーはアメリカ人。彼らの間には娘と息子が二人ずついる。娘は、私と同じ学年だが一歳年下で、身長も体型も髪型も似ているからよく間違われた。マザーはアメリカに移ってから長いので、日本語で話すことはあまりなかった。マザーはとても親切で、こころ優しい人である。また、何か困ったことがあったときも迅速に丁寧に助けてくれた。ホストマザー曰く彼女は浦島太郎状態なので、日本での生活や、最近流行っている音楽など、とても楽しんで話を聞いてくれた。上記に記した通りアメリカ初の友人は私には少しキツすぎたので、私が仲良くなりたいと思う人たちと一緒に過ごすようにした。ホストシスターは私にとってホストシスターであ

り、一番仲が良くなった友人だ。留学期間はまるで、従来の友人の家に泊まっていたような感覚があった。私が主に学校で仲良くしていた二人は、幼稚園の頃からの仲らしい。私をよくドライブに連れて行ってくれたり、ダンスパーティーにも彼女らと参加しているため、アメリカでの生活を思い出すといつも二人の姿が自然と浮かんでくる。

⑦成長したこと

私が一番驚いたことは、帰国後に母親と英語で話すことが怖くなくなったことだ。そんなことかと思うかもしれないが、私にとってはこれは大きな成長であった。また、自分の気持ちを率直に伝えることができたのも英語を話せることに自信を持てたからだと思う。それに加え、言動に責任を持ったり落ち着いて行動できるようになったりしたのも留学で経験したたくさんのことのおかげだと思う。

約一年間の留学で学んだことは、大学在学中に行う予定の留学、そして私の将来の夢にも活かせることだと思う。英語力がついたことはもちろんだが、自己解決能力や、表現力、あらゆる壁に向かって努力する力は今後の人生で活かせるスキルであると思う。

⑧留学を考えている人へ

留学は自分の内面の成長を促してくれる絶好の機会だった。英語やアメリカの文化に加え、日本の精神や文化にもより深い興味が出てきたことや、今まで疑問に思ったことがなかった日本の習慣についても興味を持つようになった。今留学を考えている人はもちろん、海外に興味がある人や自立して成長をしたい人は留学を検討してみるのもいいと思う。